［巻頭特集］美しさが、人々と社会を変える

吉田璋也が残した民藝

鳥取で民藝運動を展開し、牛ノ戸焼などの陶芸をはじめ、あらゆる手仕事の美しさを教育普及に尽力した吉田璋也。工芸や食のプロデュース、自然や文化財保護にまで及ぶ彼の功績は現在の「鳥取らしさ」の大きな要素を担っている。吉田の人物像と功績を紹介し、民藝とともにある生活の良さを考える。

早くから白樺派に傾倒 精力的に交流を広げる

吉田璋也は明治31年、鳥取市立川町の医師の家に生まれた。25歳で璋也と改名するが、誕生時は一郎と命名された。鉄棒の技「大車輪」を得意とするなど、活発なエピソードが残る。

鳥取中学（当時）時代はすでに文学少年で、友人7人と肉筆回覧誌『星』を刊行した。とりわけ傾倒したのが、明治43年に創刊された『白樺』だ。鳥取民藝美術館の常務理事・木谷清人さんは「吉田は白樺派の人道主義に共感したのではないでしょうか」と推察する。西洋の近代美術も紹介した『白樺』は、吉田に芸術への扉を開いた。その美術記事を担当していたのが、美の思想家・柳宗悦だった。

新潟医学専門学校に進んだ吉田は大正9年、白樺派の作家・武者小路実篤が宮崎県に築いた「新しき村」の新潟支部の看板を掲げる。さらに雑誌『アダム』を刊行し、名画展や音楽会、武者小路の講演会などを開催。当時22歳、目を見張る行動力である。同年、柳を千葉県我孫子に訪ね、やがて柳が起こす民藝運動に参加する。

関西や倉敷などで勤務した後、帰鳥して昭和6年に耳鼻科医院を開業。医院は大盛況で、柳は「手術の腕にもよったろうが、一つは営利を忘れた親切さが、多くの人達に慕われたのだと思う」と、後に回想している。

民藝とは「物の見方」 美による社会改革をめざす

医業の傍ら、吉田は牛ノ戸焼を皮切りに、家具、土工、漆工、金工、染織、和紙など、鳥取の多岐にわたる工人に対し制作指導を始める。

旧吉田医院は現在も民藝美術館向かいに現存、保管されている。正面の階段は丸く弧を描くバロック風。そのほかアジア、ヨーロッパ、朝鮮半島などさまざまな民族の様式を取り入れている。美しく診察・治療に適した専用の家具はすべて吉田のデザインによる。今年6月国登録有形文化財に登録。イベント時のみ一般公開

Profile

吉田 璋也

1898年鳥取市生まれ。民藝運動家にして医師。この両立について吉田は「二兎を追うのではなく、民芸の心で医者の生活をしているので、二兎でもなく一つなのです」と語っている。「美による社会改革」を求め、1972年に没するまで生涯をかけて民藝運動に尽力した。

その際、暮らしの近代化に合うスタイルを取り入れるのが、吉田流だった。ネクタイやパン皿、コーヒーカップなど、従来なかった手仕事の工芸が吉田の指導で生まれた。

作らせたものは買い上げて、昭和7年に「たくみ工芸店」を開店し、販売拠点を築いた。開店同日に設立した「鳥取民藝振興會」には、活動に賛同した吉田の同級生や地元の作家、素封家らが名を連ねた。人徳が支援を集め、翌年には柳の招きもあり銀座に東京支店を開く。鳥取で生まれた美が、東京の人々の暮らしにも広がっていった。

改めて、民藝とは何だろう。木谷さんは「物の見方」だと話す。「名もなき職人が作る日用品『下手物』にこそ美があると柳は唱え、吉田も共感しました。『貨幣的価値がある』ではなく『美しい』という見方です。地域のアイデンティティを守る、民衆による民衆のための美しいもの、それが民藝の本質と考えます」

鳥取砂丘や仁風閣の保存に吉田が力を注いだのも、美と郷土文化を守る民藝的視点での活動だった。身のまわりを「民藝の美」で満たして人間そのものを美しくする、美による社会改革。それが吉田の民藝運動だ。

鳥取民藝美術館には、吉田璋也の蒐集物や関わった製品などが展示されている。芸術鑑賞ではなく生活カタログ的な実用品の中に宿る「民藝の美」を示す目的で建てられた。上の写真は、吉田が深く携わった牛ノ戸焼。「用の美」を追求し、芸術性、実用性ともに評価を得ている

では美とは何か、その基準を示す場として鳥取民藝美術館を開館した。鳥取駅前に開設し、改築などにより現在の姿になる。「買い物がてらふらりと寄ってもらえる美術館にしたい」という吉田の願いは、やはり生活と美を近づける信念に根ざしている。

暮らしの中で生きる民藝 地元商店街と連携して発信

ライフスタイルの健康・環境志向化もあり、平成中ごろからセレクトショップ「BEAMS」が因州・中井窯の器類を扱い始めるなど、民藝は近年若い世代からも注目を集めるようになった。

鳥取市内で服屋とカレー店を営む梶川哲秀さんは、20代から民藝ファンに。「鳥取の食材はとても質がいい。盛り付ける器が地元の窯のものだと、より豊かな気持ちで食べられます。なんならコンビニの惣菜を移し替えるだけでも、全く気分が違うんです」と、愛用ぶりを話す。県内の窯はもとより、旅先でもその土地の民藝を求める。「好きな物に囲まれる暮らしは楽しい。好きな服、音楽、家具、器もそう。値段が高いという人もいますが、数年で買い換えるスマートフォンが10万円とすると、一生満足感を味わえる民藝の器は本当に高いでしょうか。ぜひ一度使って考えてほしい」と呼びかける。

その良い機会が、10月2日から11月3日にかけて駅前で開催される「みんげい みっけ！」だ。民藝カフェや陶芸体験、作品展示や旧吉田医院公開など、鳥取民藝に触れられるさまざまな催しがある。「実際に『用の美』に触れ、民藝の良さを多くの人に理解してもらえれば、作り手もさらに良いものを作れるようになる。その先に、吉田が掲げた『美による社会改革』の未来があるのではないでしょうか」と、木谷さんは夢見る。新鳥取駅前地区商店街振興組合の英義人理事長は「地域の大きな資産である民藝を核とした、文化の薫る新しいまちづくりを進めていきたい」と、鳥取太平線通り商店街振興組合の石上晋一理事長は「鳥取で育まれた民藝の文化と当商店街が掲げるSDGs活動をともに進め、アフターコロナの新しいライフスタイルを発信したい」と意気込む。

器が変われば景色が変わる。この秋、お気に入りの一品に出合えますように。

民藝ファンの梶川哲秀さん。自身が経営するカレー店だけでなく、自宅にも民藝の器を取り入れている。若い世代が興味を持つことで、民藝は次世代へと発展を続けていく

Information

鳥取民藝美術館・鳥取たくみ工芸店
鳥取市栄町651☎0857-26-2367
https://mingei.exblog.jp

鳥取民藝美術館
常務理事
吉田璋也研究者
木谷 清人さん
2011年から
鳥取市文化財団
理事長も務める

文／飯田若菜　写真提供／鳥取民藝美術館　デザイン／ABBEY ROAD

参考文献／『吉田璋也 民藝のプロデューサー』鳥取民藝美術協会編 牧野出版1998『吉田璋也の世界』鳥取民藝美術館2015